

津村秀介

長編本格推理小説

西の旅
長崎の殺人





NON POCHETTE

◆「ノン・ポシェット」創刊のことば

ノン・ポシェットは、ノン・ブック、ノン・ノベルの姉妹シリーズです。しかし、ポケットなり、ポシェットなりに楽に入る小さな判型、また既成のノン・ブック、ノン・ノベルから生み出されたという事情からいっても、むしろ両シリーズの子どもと申せましょう。両シリーズの数ある本の中から、豊かな心、深い知恵、大きな楽しみに満ち、年月を経ても色褪せない「現代の古典」となるべきものばかりを厳選したつもりです。どうか親版のノン・ブック、ノン・ノベル両シリーズ同様、このノン・ポシェット・シリーズをご愛読いただき、進んでご意見、ご希望を編集部までお寄せくださるよう、お願いいたします。

昭和六〇年八月一日

NON・POCHETTE編集部

●ノン・ポシェット—NPN323

西の旅 長崎の殺人

長編本格推理小説

平成5年7月20日 初版第1刷発行

著者 津村 秀介

発行者 伊賀 弘三 良

発行所 祥伝社

東京都千代田区神田神保町3-6-5
九段尚学ビル 〒101

☎ 03 (3265) 2081 (営業)

☎ 03 (3265) 2080 (編集)

印刷所 堀内印刷

製本所 関川製本

万一、落丁・乱丁がありました場合は、お取りかえします。

Printed in Japan

ISBN4-396-32323-9 C0193

©1993, Shūsuke Tsumura

長編本格推理小説

西の旅 長崎の殺人

津村秀介

前橋市立図書館
館外用

目次

1章 ツインルームから消えた夫婦

7

2章 半月で辞めたホステス

47

3章 広島^{ひろしま}の姉と横浜^{よこはま}の妹

87

4章 勝田^{かつた}行き、上^エ特急“ひたち137号”

137

5章 一億円^{こころし}の殺人

189

6章 逆行の構図

239

解説 浦野春樹^{うらの はるき}

291

1章

ツインルームから消えた夫婦

ホテル庭先の大きい蘇鉄そてつに、夜来やらいの雨が降っている。

葉を伸ばした蘇鉄の向こう側に、大型船の停泊する長崎港が見える。

長く湾入した天然の良港は三方を丘陵に囲まれており、長崎の住宅地は、ぎっしりと、頂上に向かって伸びている。

そう、長崎は坂の町である。

雨が似合う町でもあった。雨が似合うのは、石畳が多いせいだろう。

石畳のオランダ坂を下った海寄り、南欧風の七階建てが、『ホテル・ポート長崎』だった。長崎はホテルが多いけれど、中でも『ホテル・ポート長崎』は、一流中の一流だ。

グラバー園の近くで、外国船棧橋さんばしがすぐ目の前という立地条件。港に面した広い芝生の庭には、たくさんの蘇鉄が植えられている。

客室二百を超える、シティーホテルのチェックアウトタイムは、午前十一時となっている。

午前十一時を、三十分過ぎても、五階516号、ツインルームの客が下りてこなかった。

逗留客とうりゆうを別にして一般客は、十時頃までには支払いを済ませるのが普通だ。十一時を過ぎて

もキーを返さない客は珍しい。

516号室の客は、夫婦者だった。

田中一郎三十歳、田中和子二十九歳と宿泊者カードには記されている。住所は大阪市阿倍野区長池町となっている。

何かトラブルがあったのだろうか。

フロントのマネージャーは、何度も腕時計を見た。

ロビーの客も少なくなっている。ホテルは、一日の中でも、もっとも閑散な時間を迎えようとしている。

がらんとした、広いロビーに目を向けているうちに、マネージャーの不審が高まった。

マネージャーが電話機に手を伸ばして、五階の客室係に516号室のチェックを命じたのは、昨日、チェックインのときの夫婦を記憶しているためだった。

大勢の宿泊客の中で、二人を覚えてるのは、職業のせいばかりではなかった。

二人は似合いのカップルというべきか、美男美女だった。男は細面で背が高く、女性のほうは、ほっそりとした体つきで、色白だった。

二人は、長崎空港着十六時四十五分の“ANA167便”でやって来た。大阪からの飛行機だった。空港には、『ホテル・ポート長崎』の送迎マイクロバスが出ている。

田中夫婦は、送迎マイクロバスを利用して、チェックインした。

予約は、大阪・梅田^{うめだ}の旅行社を通してであり、宿泊費はクーポン券での前払いだった。ツインルームは一万五千円から四万三千円と三ランクに分かれているが、旅行社を介しての予約は、三万五千円の部屋だった。

身につけているスーツなども、一目で高級品と分かった。

職業は会社員となっているけれど、然るべき会社経営者の子息夫婦なのかもしれない、と、マネージャーは思った。

二人は、一流ホテルに泊まり慣れている感じだった。

その限りにおいて、不審はない。それにもかかわらず、マネージャーがとくに記憶しているのは、二人が意識して視線を避け、ホテルの従業員から顔を背ける^{そむ}ようにしていたためだった。

『ホテル・ポート長崎』は開業して五年になるが、一度だけ、宿泊客による心中未遂事件があった。

田中夫婦の雰囲気^{はつか}が、心中を図った男女に似ていたような気がする。フロントのマネージャーが客室係を516号室に向かわせたのは、本能的に感じた不審のせいである。

マネージャーの疑惑が、不幸な形で中したのは、客室係にチェックを命じてから、三分と経たないうちだった。

フロントの電話がけたたましく鳴り、受話器を取ったマネージャーの耳に飛び込んできたのは、

「死、死んです！ 男の人が首を絞められて殺されています！」

若いボーイの、引きつったような甲高い声^{かんだか}だった。

「女性のお客様はどうした？ 女の人も死んでいるのか」

「いえ、女性の姿は見えません」

ボーイの声はさらに高くなって、抑揚^{よくよう}を欠いた。

五月三十一日、水曜日のことである。

*

『ホテル・ポート長崎』から一一〇番が入ったのは、午前十一時四十五分だった。

通報を受けた長崎県警本部通信司令室では、直ちに所轄^{ただ}の長崎西署へ連絡。捜査員の緊急出勤となった。

長崎西署は、市内電車・公会堂前停留所の近くだった。眼鏡橋^{めがね}などがある中島川^{なかじま}沿いを飛ばして、港まで、車で十分とはかからない近距離である。

雨の中をパトカーとジープが、『ホテル・ポート長崎』へ向かった。パトカーには署長、刑事課長などが乗り込み、二台目のジープには鑑識係と一緒に、橋田部長刑事が乗っていた。

長身やせ型の橋田は四十九歳。私服になって二十年目を迎える文字どおりのベテランであり、まったくものに動じない、ひょうひょうとした人柄だった。

小太りの署長を先頭とする七人の捜査員は、蘇鉄の手前にパトカーとジープを止め、雨が降る芝生の庭を走って、裏口からホテルへ入った。

待っていたマネージャーの先導で、一行は従業員専用エレベーターを使って、五階へ上がった。

516号室の前には、第一発見者であるボーイが、緊張した表情で立っていた。

「こちらです」

マネージャーが、ドアを開けようとするのを、

「あ、待ってください」

橋田部長刑事が制した。

ノブの指紋採取が先だった。

鑑識係が進み出て、型どおりの作業を終えてから、改めて、ドアが開けられた。

マネージャーは入口付近にたたずみ、白い手袋をはめた捜査員だけが、ツインルームに入っ

た。

レースのカーテン越しに、雨にけむる長崎港を見下ろす部屋だった。

田中一郎と名乗って投宿した男は、すでに、完全に息絶えていた。

ベランダ近くに二人用の応接セットが置かれており、男はソファの上で首を絞められていた。凶器はベッドのシーツ。

縫ったシーツが、そのまま男の首に食い込んでいる。

男はオープンシャツに、紺のブレザーを着ており、きちんと靴も履いている。

「入ってすぐ殺られたのかな」

刑事の一人は、死者の服装を見てつぶやいたが、そうではなさそうだった。

ベッドは二つとも使用された形跡があるし、部屋に備え付けられた歯ブラシなどは二人分が失くなっている。バスも使われている。

男は昨夕のチェックイン直後ではなく、朝を迎えて、チェックアウトのため着替えた矢先に襲われた、ということになりそうである。

「主任、変ですよ」

怪訝な表情で橋田に報告したのは、最近コンビを組んでいる若手刑事だった。若手刑事は、刑事課長に命じられて、くずかごを当たっていたのだが、

「ゴミが何も残っていません」

びっくりしたような声で言った。

くずかごはベッド脇、ソファの陰、そして、洗面所と三カ所に置かれてあるのだが、

「三つともきれいですよ。それこそ、チリ一つ残っていません」

と、若手刑事は三つのくずかごを橋田の前に並べた。

「歯みがきセットが失くなっていると言ったな。それも捨ててないのか」

「これだけの部屋に泊まった人間が、使用済みの歯ブラシを持って帰るってことはないでしょうに」

「チリ紙一つ残っていないとは、犯人が証拠物件を持ち去ったか」

ベテラン部長刑事は、ひょうひょうとした口調でつぶやいたが、それはすぐに、鑑識によって裏付けられた。

「署長、こんなの初めてですよ」

鑑識係は、捜査員全員に聞こえるような声で報告した。

ツインルームの指紋は、すべて、きれいに拭き取られているというのである。ドアのノブと受話器からは指紋が検出されているけれど、これは第一発見者であるボーイが触れている個所だ。もちろん照合するが、

「採取した指紋は、ボーイさんのものに間違いないでしょう」

と、鑑識係はつづけた。

灰皿も、使用された痕跡は認められるのだが、吸い殻は一つも残っていなかった。吸い殻があれば、唾液の分析で、血液型を割り出すことができる。

それにしても、指紋をきれいに抜き取っていくとは、消えた女は、指紋一つで身元が発覚してしまう人間、ということになるのか。

すなわち、前科を持っているということだ。

「望みはベッドだな」

刑事課長は両腕を組んで、二つ並んだベッドを睨みつけた。

ベッドが使用されているのなら、（犯人がいかに関心して片づけていこうと）どこかに毛髪などの付着している可能性がある。一本の髪の毛が、事件を解決に導いた体験を、刑事課長は持っている。

ベッドの検証は、慎重の上にも、慎重を期して行なわれた。

その結果、幸いなことに、三本の毛髪を収集することができた。

正確なことは精密検査を経なければ分からないが、その太さから推して、

「一本は男性、二本が女性のものと思われます」